

平成 24 年度

病害虫発生予報第 4 号

平成 24 年 7 月 19 日

三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/boiyosyo/>

目 次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠	7
4. 予察項目の見方	13
5. 今月のトピックス（チャノミドリヒメヨコバイについて）	14
6. 気象のデータ	15
7. おしらせ	17

1. 向こう 1 か月の予報と対策

1) 作物

イネでは、斑点米カメムシ類、イネクロカメムシの発生量はやや多と予想されます。斑点米カメムシ類の薬剤散布は穂揃い期に行い、多発圃場では追加防除を実施してください。イネクロカメムシの多発圃場では薬剤散布を行いましょ。穂いもち、白葉枯病、セジロウンカ、トビイロウンカの発生量は平年並、ツマグロヨコバイの発生量はやや少、紋枯病の発生量は少と予想されます。

ダイズでは、紫斑病、コガネムシ類、吸実性カメムシ類の発生量はやや多と予想されます。紫斑病は種子消毒を徹底してください。コガネムシ類および吸実性カメムシ類は、圃場での発生状況に注意してください。ハスモンヨトウの発生量はやや少と予想されます。

2) 果樹

カンキツでは、黒点病、かいよう病（中晩柑）、ミカンハダニの発生はやや多と予想されます。黒点病およびかいよう病（中晩柑）では、伝染源を除去し、天候に注意して薬剤散布を行ってください。ミカンハダニでは、

圃場の発生状況をよく観察して、防除を実施してください。かいよう病（温州みかん）、チャノキイロアザミウマの発生量は平年並と予想されます。

果樹共通では、果樹カメムシ類の発生量は多と予想されます。カンキツ、ナシ、カキ等での被害発生に注意し、圃場への飛来が認められたら直ちに防除してください。

3) 茶

チャでは、炭疽病、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、チャノコカクモンハマキの発生量はやや多と予想されます。炭疽病は 1 葉展開期に、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマは開葉初期に、チャノコカクモンハマキは成虫発生ピークの 10 日～14 日後に防除しましょう。カンザワハダニの発生量はやや少と予想されます。

4) 野菜

イチゴでは、炭疽病の発生量はやや多と予想されます。薬剤による予防防除と、発病株およびその周辺株の除去を徹底してください。

2. 作物別の状況

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
		平年比	平年比	程度	平年比	下旬	上旬	中旬	下旬	
イネ	穂いもち	-	平年並	中	普通		<ol style="list-style-type: none"> 1) 病害虫防除技術情報第 11 号 (7月 17 日発表)。 2) 葉いもちが発生している圃場では、出穂前に防除を徹底し、止葉への進展を防ぎましょう。 3) 穂いもち防除は、穂ばらみ期から穂揃い期の予防散布が重要です。 4) 出穂後も雨天が続く場合は、追加防除を行いましょう。 			
	紋枯病	-	少	小	低		<ol style="list-style-type: none"> 1) 前年、発生が多かった圃場では注意してください。 2) 多肥、過繁茂の圃場では発生しやすくなります。 			
	白葉枯病	-	平年並	小	低		<ol style="list-style-type: none"> 1) 常発地では、台風の影響直後に薬剤散布してください。 2) 「みえのゆめ」は弱い品種なので注意が必要です。 			
	斑点米カメムシ類	-	やや多	中	普通		<ol style="list-style-type: none"> 1) 病害虫防除技術情報第 10 号 (7月 11 日発表)。 2) 薬剤防除は穂揃い期に散布しましょう。広域での一斉防除が効果的です。 3) 例年被害の多い地域では、穂揃い期とその 7~10 日後の 2 回散布を実施してください。 			
	イネクロカメムシ	-	やや多	中	普通		<ol style="list-style-type: none"> 1) 発生圃場では、これから出すくみ穂や白穂被害が目立つようになります。 2) 日中は株元に潜んでいるため、薬剤散布は株元までかかるように行ってください。 			

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
							下旬	上旬	中旬	
イネ	ツマグロヨコバイ	-	やや少	中	低					1) 9月上旬までに収穫する圃場では、実害はほとんどありません。
	セジロウンカ	-	平年並	小	低					1) 本年は多飛来がありません。
	トビイロウンカ	-	平年並	小	低					1) 本年は多飛来がありません。
ダイズ	紫斑病	-	やや多	小	普通					1) これから播種する圃場では、種子消毒を徹底しましょう。 2) 莢が形成され始めたら薬剤散布してください。
	コガネムシ類	-	やや多	中	普通					1) 通常は防除の必要はありませんが、多発する場合は加害初期に防除してください。 2) ヒメコガネとドウガネブイブイは夜行性の種のため、夕方に薬剤散布すると効果的です。
	ハスモンヨトウ	-	やや少	小	普通					1) 白変葉を目印に早期発見に努め、若齢幼虫期に防除してください。 2) 発生量が急増することがありますので、防除所ホームページにおいて、フェロモントラップでの発生状況に注意してください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
ダイズ	吸実性カメムシ類	-	やや多	中	普通			開花 ↓		<ul style="list-style-type: none"> 1) 薬剤散布は広域一斉防除が効果的です。 2) 開花終期から莢伸長期に防除してください。
カンキツ	黒点病	-	やや多	中	普通					<ul style="list-style-type: none"> 1) 薬剤散布を定期的を実施し、8月下旬まで感染防止に努めてください。 2) 梅雨明け後は感染源となる枯枝が増加するので、切除に努めてください。 3) 薬剤散布後、積算で200mm以上の降雨があったら、次の防除を実施してください。
	かいよう病	-	温州 平年並 中晩柑 やや多	温州 小 中晩柑 中	温州 普通 中晩柑 高					<ul style="list-style-type: none"> 1) 現段階で果実・夏枝に病斑が見られる圃場では、発病した枝・葉・果実を除去し、早急に薬剤防除を行ってください。 2) 防風対策に努め、台風の接近が予想される場合には、直前に防除してください。 3) 高接樹や幼木については、ミカンハモグリガの防除も徹底してください。
	ミカンハダニ	-	やや多	中	普通					<ul style="list-style-type: none"> 1) 1葉当りの雌成虫寄生数が0.5～1.0頭程度を目安に防除してください。 2) 高温により活動が停滞する時期ですが、圃場での発生状況をよく確認し、多発している場合は防除してください。 3) 薬剤散布は葉裏にかかるよう、丁寧に散布してください。 4) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統の薬剤の連用を避けてください。
	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	中	普通					<ul style="list-style-type: none"> 1) 寄生果率10%になった時を防除の目安にしてください。 2) 7月以降は、寄生部位が果頂部に移ります。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
果樹共通	カメムシ類	-	多	大	高		<ol style="list-style-type: none"> 圃場内の観察をきめ細かく行い、飛来が認められたら防除を実施してください。 圃場（特にカンキツ、ナシ、カキ）によっては局所的に飛来してきます。特に、過去に発生が多かった圃場周辺では注意してください。 ナシ、ブドウの有袋栽培では、袋と果実が密着すると、袋の上から加害されることがあるので注意してください。 			
	炭疽病	-	やや多	中	普通		<ol style="list-style-type: none"> 刈り遅れや旧葉に病斑が多い圃場では注意しましょう。 新葉の1葉展開期に防除しましょう。 整枝による病斑葉の刈り落としも防除効果があります。ただし、葉層の確保充実も考慮しましょう。 			
	カンザワハダニ	-	やや少	小	普通		<ol style="list-style-type: none"> 発生が少なければ防除の必要はありません。 夏期に乾燥が続くと多くなります。 薬剤抵抗性が発達しないように同一系統の薬剤の連用は避けましょう。 			
	チャノミドリヒメヨコバイ	-	やや多	中	普通		<ol style="list-style-type: none"> 晴天が続くと発生が多くなります。 新芽の開葉初期に防除しましょう。 一斉防除が効果的です。 吸汁加害された新芽では、しばしば赤葉枯病を併発します。 			
チャノキイロアザミウマ	-	やや多	中	普通		<ol style="list-style-type: none"> 新芽の葉柄基部や未展開葉の内部などを吸汁加害します。 新芽の開葉初期に防除しましょう。 チャ以外にイヌマキやサクラでも発生するので、これらが圃場周辺にある場合は注意してください。 				

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項	
						7月	8月				
						下旬	上旬	中旬	下旬		
チャ	チャノコカクモンハマキ	-	やや多	小	普通	第2世代成虫					<p>1) 防除所ホームページにフェロモントラップ誘殺数を掲載していますので、発生状況を確認して防除時期の参考としてください。</p> <p>2) 若齢幼虫を対象とした防除が効果的です。各世代の成虫発生最盛期の10日～14日後が防除適期です。</p> <p>3) 整枝により巻葉を刈り落とすことも防除効果があります。</p>
イチゴ	炭疽病	-	やや多	中	普通	発生密度					<p>1) 発病株は感染源となるため、周辺株も含めて速やかに除去し、圃場外に持ち出して適切に処分してください。</p> <p>2) 薬剤による予防防除を徹底してください。葉かき作業後や降雨、台風等の前後は特に重点的に防除してください。</p> <p>3) 耐性菌の発生を防ぐため、同一薬剤や同一系統薬剤の連用は避けてください。</p> <p>4) 病原菌を含む水滴の跳ね返りによって感染が拡大します。水滴が跳ね返らないよう丁寧に灌水を行ってください。</p>

3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	穂いもち	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報（7月13日発表）によると、期間のはじめは平年と同様に曇りや雨の日が多く、その後は平年と同様に晴れの日が多い見込み（±）</p> <p>2) プラストム（7月12日現在）によると、葉いもちの感染好適条件は7月1日に全県的に出現後、各地域で繰り返し出現（+）</p> <p>3) 巡回調査圃場（7月第1週）では、葉いもちの発生圃場率17.8%（5年平均30.7%）、発病度0.8（5年平均3.3）と少ない傾向（-）、発病株における上位葉への進展率1.6%（5年平均1.6%）と平年並の傾向（±）、発生圃場では感染力の強い進展型の病斑を確認、一部でずり込み症状が発生（+）（±）</p> <p>4) 一般圃場では、葉いもち発生量は微～やや多（概して平年並）（±）</p> <p>考察： 今後の気象条件、巡回調査結果、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	紋枯病	-	少	<p>要因</p> <p>1) 巡回調査圃場（7月第1週）では、発生圃場率4.1%（平年10.1%）と少、被害株率0.3%（平年1.9%）と少（-）</p> <p>2) 一般圃場では、発生量は無～平年並（概して少）（-）</p> <p>考察： 現状の発生量は少と考えられ、引き続き予想発生量は少と考えます。</p>
	白葉枯病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 6月下旬以降、強風を伴う降雨の発生はなし（±）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第1週）では、発生圃場率0%（平年0%）と平年並（±）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並（概して平年並）（±）</p> <p>考察： 現状の発生量は平年並に少と考えられ、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	斑点米カメムシ類	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（松阪市・4月第1半旬～7月第2半旬）では、誘殺数はアカスジカスミカメ4頭（平年32.1頭）と少、アカヒゲホソミドリカスミカメ29頭（平年49.7頭）と少（-）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第1週）では、畦畔イネ科雑草すくい取りによる発生地点率および成幼虫数は、中型種ではホソハリカメムシ28.8%（平年24.1%）と多、0.5頭（平年0.6頭）とやや少、クモヘリカメムシ6.3%（平年6.1%）と平年並、0.6頭（平年0.4頭）と多、シラホシカメムシ類15.6%（平年10.2%）と多、0.3頭（平年0.2頭）と多（+）。微小種ではアカスジカスミカメ36.3%（平年17.8%）と多、5.5頭（平年2.0頭）と多（+）（+）</p> <p>3) 広域防除員調査（7月上旬）では、畦畔イネ科雑草すくい取りにおいて、県内の広い範囲でホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシ類を確認（+）</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は無～やや多（概して平年並）（±）</p> <p>考察： 巡回調査結果、広域防除員調査結果を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	イネクロカメムシ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（松阪市・4月第1半旬～7月第2半旬）では、誘殺数は水田位置0頭（平年12.0頭）と少、畑位置202頭（平年252.4頭）と少（-）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第1週）では、発生圃場率29.1%（9年平均20.8%）と多い傾向、被害株率4.1%（9年平均3.2%）と多い傾向（+）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～やや多（概して平年並）（±）</p> <p>考察：巡回調査結果、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	ツマグロヨコバイ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（松阪市・5月第1半旬～7月第1半旬）では、誘殺数は松阪市0頭（平年10.4頭）と少、伊賀市29頭（平年38.7頭）と平年並、紀北町2頭（平年4.0頭）と平年並、御浜町8頭（平年2.3頭）と多（±）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第1週）では、発生圃場率29.1%（平年28.2%）と平年並、払い落とし成虫数0.2頭（平年0.9頭）と少、同・幼虫数0.7頭（平年3.0頭）と少（-）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並（概して少）（-）</p> <p>考察：予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況から、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	セジロウンカ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（5月第1半旬～7月第1半旬）では、誘殺数は松阪市4頭（平年2.2頭）とやや多、伊賀市2頭（平年2.2頭）と平年並、紀北町9頭（平年14.3頭）と平年並、御浜町17頭（平年28.7頭）とやや少（±）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第1週）では、紀州での発生圃場率14.3%（平年43.6%）と少、払い落とし成虫数0.2頭（平年2.2頭）と少、県全体では発生圃場率5.0%（平年11.8%）と少、払い落とし成虫数0.06頭（平年1.2頭）と少（-）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並（概して平年並）（±）</p> <p>4) 九州各県の病害虫防除所情報では、7月上旬に多飛来を観測（±）</p> <p>考察：予察灯および他県の飛来状況から、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	トビイロウンカ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（5月第1半旬～7月第1半旬）では、松阪市、伊賀市、紀北町、御浜町ともに未飛来（平年7月上旬未飛来）（±）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第1週）では、発生圃場率0%（平年0.1%）と平年並に少ない傾向（±）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並（概して平年並）（±）</p> <p>4) 九州各県の病害虫防除所情報では、多飛来は未確認（±）</p> <p>考察：予察灯および他県の飛来状況から、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
ダイズ	紫斑病	-	やや多	要因 1) 巡回調査圃場(昨年11月)では、紫斑粒発生率0.3%(平年0.2%)とやや多 (+) 考察: 昨年の発生状況から、予想発生量はやや多と考えます。
	コガネムシ類	-	やや多	要因 1) 予察灯(4月第1半旬~7月第2半旬)では、誘殺数はドウガネブイブイ228頭(平年181.0頭)と多、ヒメコガネ38頭(平年58.9頭)と少 (+) 2) 県予察圃フェロモントラップ(5月上旬~7月上旬)では、誘殺数はマメコガネ254頭(平年192.8頭)と多、ドウガネブイブイ65頭(平年42.5頭)と多、ヒメコガネ6頭(平年16.8頭)と少 (+) 考察: 予察灯およびフェロモントラップの誘殺状況から、予想発生量はやや多と考えます。
	ハスモンヨトウ	-	やや少	要因 1) フェロモントラップ(6月第1半旬~7月第2半旬)では、誘殺数は菰野町で139頭(6年平均218.1頭)と少ない傾向、津市で250頭(6年平均330.6頭)とやや少ない傾向、松阪市で129頭(平年323.5頭)と少 (-) 考察: フェロモントラップの誘殺状況から、予想発生量はやや少と考えます。
	吸実性カメムシ類	-	やや多	要因 1) 予察灯(4月第1半旬~7月第2半旬)では、誘殺数はアオクサカメムシ1頭(平年64.2頭)と少、イチモンジカメムシ28頭(平年27.5頭)と平年並、クサギカメムシ24頭(平年65.0頭)とやや少 (-) 2) 近年ミナミアオカメムシは、伊賀地域と中山間地域を除くほぼ県全域で発生が確認されており、水稻巡回調査(7月第1週)では、畦畔雑草において成幼虫の発生を確認 (+) 考察: 畦畔雑草におけるミナミアオカメムシの発生状況から、予想発生量はやや多と考えます。
カンキツ	黒点病	-	やや多	要因 1) 1か月予報(7月13日発表)によると、期間のはじめは平年と同様に曇りや雨の日が多く、その後は平年と同様に晴れの日が多い予想 (±) 2) 県予察圃(7月中旬)では、果実発病度37.7(平年27.8)と多 (+) 3) 巡回調査圃場(7月第1週)では、果実発病度2.1(平年0.6)と多 (+) 4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+) 5) 感染源となる枯枝は平年並 (±) 考察: 一般圃場での発生状況を重視して、現状の発生量はやや多と思われ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	かいよう病	-	温州 平年並 中晩柑 やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月13日発表)によると、期間のはじめは平年と同様に曇りや雨の日が多く、その後は平年と同様に晴れの日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬、新甘夏)では、発病葉率 1.7%(平年 11.3%)、発病果率 5.0%(平年 23.2%)といずれも少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第1週)では、温州みかんは発病葉率 0.3%(平年 0.8%、ただし5か年は0%)、発病果率 0%(平年 0.1%)といずれも平年並(±)、中晩柑は発病葉率 16.3%(平年 12.3%)と多(+)、発病果率 3.3%(平年 2.2%、ただし6か年は0%)とやや多(+)(温州±、中晩柑+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察： 現状の発生量は温州みかんでは平年並、中晩柑類はやや多と思われ、引き続き予想発生量は温州みかんは平年並、中晩柑はやや多と考えます。</p>
	ミカンハダニ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月13日発表)によると、期間のはじめは平年と同様に曇りや雨の日が多く、その後は平年と同様に晴れの日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬)では、100葉当り寄生頭数は無防除区で2.2頭(平年 14.7頭)と少、慣行防除区で0頭(平年 2.7頭)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第1週)では、新葉における寄生葉率 17.8%(平年 9.4%)と多、寄生頭数 1.12頭/葉(平年 0.35頭/葉)と多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察： 現状の発生量は圃場によるばらつきがありますがやや多と思われ、大きな増減の要因はなく、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃黄色粘着トラップ(7月上旬)では、誘殺数 0.82頭/日(平年 2.89頭/日)と少 (-)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬)では、100果当り寄生虫数 0.8頭(平年 12.9頭)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第1週)では、被害果率 2.6%(平年 0.9%、ただし6か年は0%)とやや多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察： 現在の発生量は平年並と思われ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
果樹共通	カメムシ類	-	多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(御浜町:7月1日~7月10日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 7,181 頭(平年 2,338 頭)と多、ツヤアオカメムシ 33 頭(平年 17 頭)と多 (+)</p> <p>2) 予察灯(畑・松阪市:6月16日~7月15日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 2,194 頭(平年 692 頭)と多(+)、ツヤアオカメムシ 1,548 頭(平年 278 頭)と多(+)、クサギカメムシ 46 頭(平年 108 頭)とやや少(-) (+)</p> <p>3) フェロモントラップ(6月9日~7月8日)では、チャバネアオカメムシ誘殺数は山地(津市白山町川口)で 515 頭(平年 802 頭)と少(-)、中間地(津市白山町二本木)で 1,192 頭(平年 1,274 頭)と平年並(±)、平坦地(松阪市嬉野川北町)で 187 頭(平年 268 頭)とやや少(-) (-)</p> <p>4) 巡回調査圃場(7月第1週)では、たたき落とし調査では飛来を未確認であったが、ナシ圃場1か所でチャバネアオカメムシを確認、カキおよびブドウ圃場各1か所で果実被害を確認 (+)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや多と思われるが、今後圃場への飛来が増加すると考えられ、予想発生量は多と考えます。</p>
	チャ	炭疽病	-	やや多
	カンザワハダニ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月13日発表)によると、期間のはじめは平年と同様に曇りや雨の日が多く、その後は平年と同様に晴れの日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(7月上旬)では、寄生葉率 0%(平年 2.2%、ただし5か年は0%)、寄生頭数 0 頭/葉(平年 0.07 頭/葉、ただし5か年は0頭/葉)といずれも平年並 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第1週)では、寄生葉率 0.5%(平年 0.9%)とやや少、寄生頭数 0.04 頭/枚(平年 0.02 頭/枚)と多 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや少 (-)</p> <p>考察: 一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生量はやや少と判断され、大きな増加要因はないので、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノミドリヒメ ヨコバイ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃吸引粘着トラップ(6月第3半旬~7月第2半旬)では、捕殺数4頭(平年13.6頭)と少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第1週)では、たたき落とし虫数4.0頭(平年2.2頭)と多 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや少 (-)</p> <p>考察: 巡回調査結果を重視して、現状の発生量はやや多と判断され、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	チャノキイロアザ ミウマ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃吸引粘着トラップ(6月第3半旬~7月第2半旬)では、捕殺数658頭(平年6,514頭)と少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第1週)では、たたき落とし虫数56.5頭(平年23.9頭)と多 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察: 巡回調査結果を重視して、現状の発生量はやや多と判断し、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	チャノコカクモン ハマキ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃フェロモントラップ(6月第3半旬~7月第2半旬)では、誘殺数74頭(平年333頭)と少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第1週)では、ハマキムシ類巻葉数1.0枚/m²(平年0.4枚/m²)と多 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察: 巡回調査結果および一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生量はやや多と判断され、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
イチゴ	炭疽病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月13日発表)によると、期間のはじめは平年と同様に曇りや雨の日が多く、その後は平年と同様に晴れの日が多い予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第1週、苗床)では、発病株率0%(平年0.4%)と平年並に少であるが、一部の親株やランナーで発病を確認 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(昨年11月第2週)では、発病株率1.8%(平年0.2%)と多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少~やや少(概してやや少)であるが、一部で発病を確認 (±)</p> <p>考察: 現状の発生量は平年並と思われますが、昨年の状況と今後の増加を考慮して、予想発生量はやや多と考えます。</p>

4. 予察項目の見方

1) 「作物別の状況」の見方

発生時期（平年比）： 平年の発生月日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数	-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	1	2	3	4	5	6
評価	早	やや早		平年並				やや遅		遅			

発生量（平年比）： 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

	平年値 ↓					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並		やや多	多

発生量（程度）： 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量（平年比）」と比べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よ

りやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

要防除圃場率（平年比）： 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除をしていればいいと予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要な圃場の割合が相当増加すると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか防除しなくても済むような圃場の割合が相当増加すると予想されます。

低	普通	高
---	----	---

発生消長の一例： 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

防除の注意事項： 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

2) 「発生時期・発生量（平年日）の予察根拠」の見方

（±）：平年並の要因

（+）：発生量増加または発生時期遅延の要因

（-）：発生量減少または発生時期早期化の要因

5. 今月のトピックス 「チャノミドリヒメヨコバイについて」

1. どんな虫？

茶の新芽を加害する微小な害虫です。成虫の体長は3mm程度、横に歩くのでヨコバイと名付けられています。通称「ウンカ」と呼ばれることもあります(図1)。



図1 チャノミドリヒメヨコバイ成虫

2. 生態と被害

三重県では成虫で越冬し、新芽が動き出す4月中旬頃から活動を始め、年間5~8世代発生します。二茶期から秋にかけて発生が多くなり、新芽の伸長とともに発生が増加します。特に、二茶期以降に晴天が続くと多発します。また、南面の暖かい傾斜園や風通しの悪い園、台切り更新園や幼木園で発生が多くなる傾向があります。

加害された新葉は、吸汁痕付近から葉脈が褐変し、葉全体が黄色くなり、新芽が萎縮します。吸汁された痕が褐色の斑点状に見えることもあります。たびたび赤葉枯病を併発して、新葉の先端が褐色~黒褐色を呈し、ひどい場合は落葉します(図2)。



図2 吸汁による赤葉枯病の併発状況(松阪市嬉野中川町 2012年7月10日撮影)

3. 防除

農薬による防除が基本です。新芽の開葉初期に防除することが重要です。集団茶園では一斉防除により効果的に防除できます。農薬はラベルを確認して正しく使用してください。また、農業研究所茶業研究室(亀山市)における発生活消長のグラフ(図3)を病虫害防除所ホームページで提供していますので参考にしてください(<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/>)。

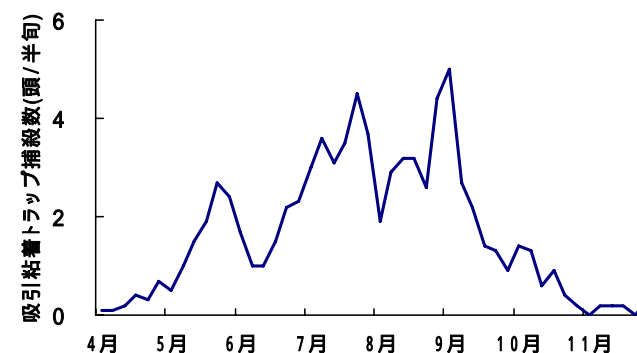


図3 チャノミドリヒメヨコバイ発生活消長(亀山市:茶業研究室) 吸引粘着トラップによる半月ごとの捕殺数。過去10年間(2002~2011年)の平均。

6. 気象のデータ

東海地方 1 か月予報 (平成 24 年 7 月 13 日 名古屋地方気象台発表)

東海地方の向こう 1 か月は、期間のはじめは梅雨前線や低気圧の影響で、平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みですが、その後は太平洋高気圧に覆われ、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

1 週目 7 月 14 日 ~ 20 日	梅雨前線や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、期間のはじめと終わりは雨の降る日があるでしょう。	津の降水日数・晴れ日数の平年値 2.7 日・3.5 日
2 週目 7 月 21 日 ~ 27 日	太平洋高気圧に覆われて、平年と同様に晴れの日が多いですが、湿った気流の影響で雲の広がる時期がある見込みです。	同 2.2 日・4.3 日
3~4 週目 7 月 28 日 ~ 8 月 10 日	太平洋高気圧に覆われて、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。	同 3.9 日・9.5 日

東海地方週間天気予報 (平成 24 年 7 月 18 日 10 時 35 分 名古屋地方気象台発表)

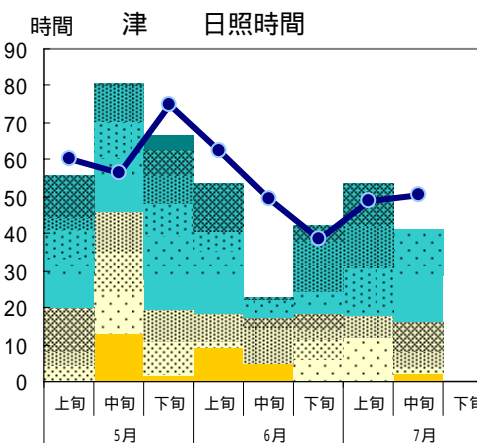
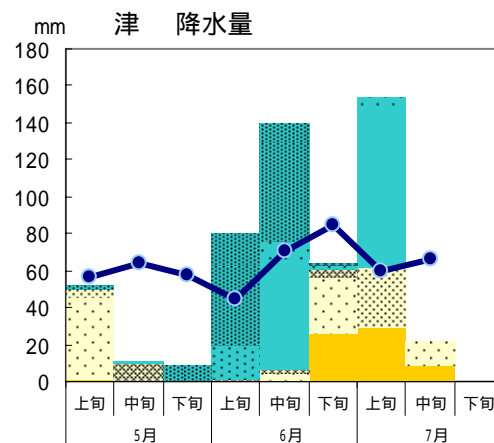
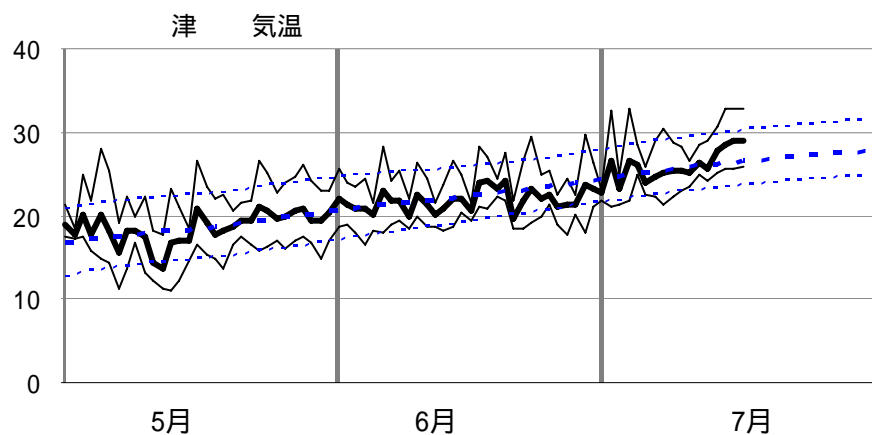
予報期間 7 月 19 日 ~ 7 月 25 日

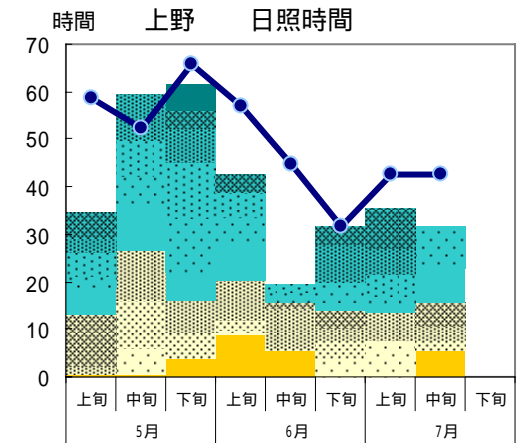
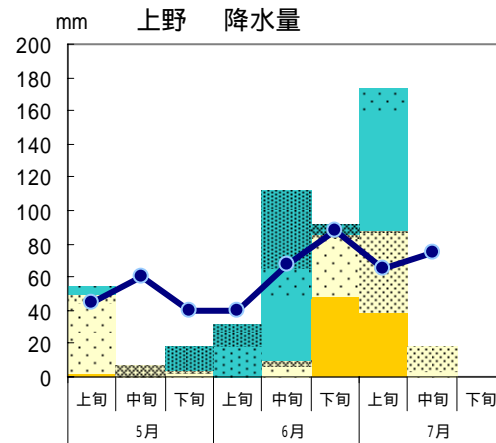
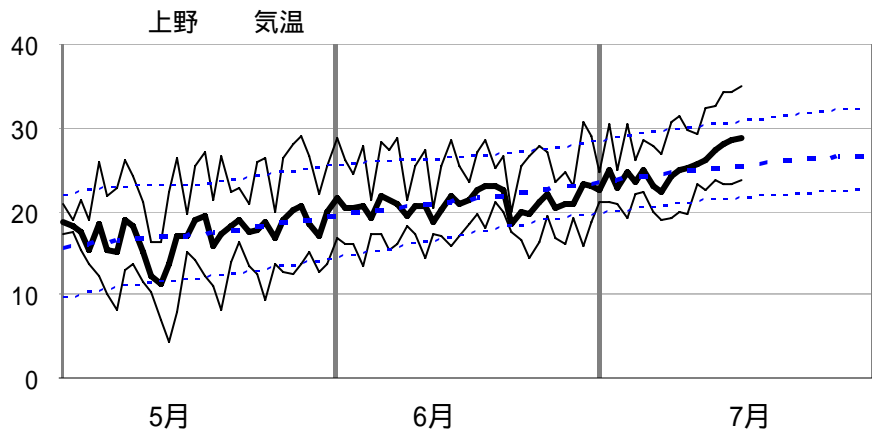
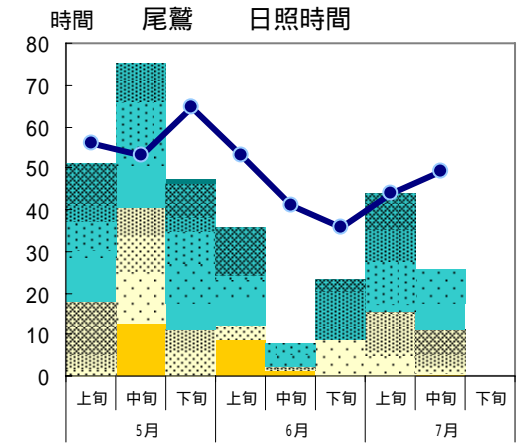
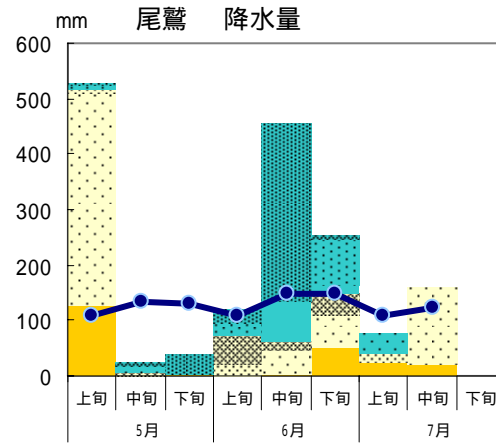
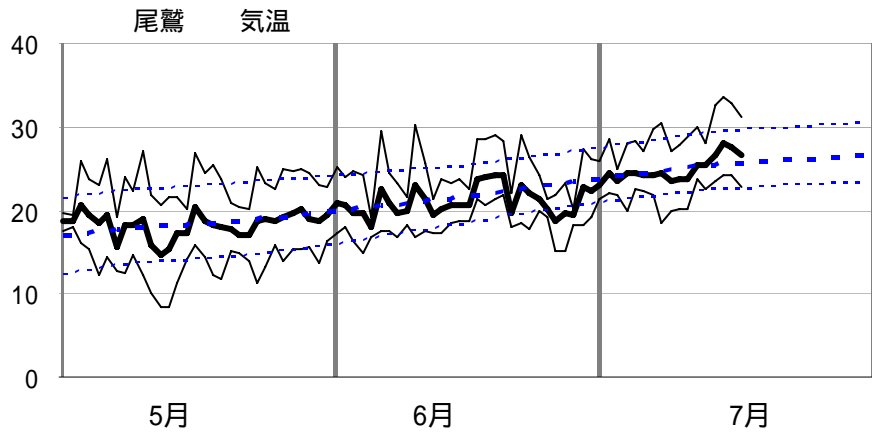
向こう一週間は、19 日と期間の終わりは高気圧に覆われて晴れますが、中頃は上空の寒気や湿った気流の影響で雲が広がりやすいでしょう。

最高気温と最低気温はともに、期間のはじめは平年より高く、かなり高い所もありますが、その後は概ね平年並でしょう。熱中症など健康管理に注意して下さい。

降水量は平年より少ないでしょう。

気象の日別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成) (7 月 17 日まで)





- 凡例
- 平均
 - 最高
 - 最低
 - - - 平年平均
 - - - 平年最高
 - - - 平年最低

- 凡例
- 31日
 - 旬10日目
 - 旬9日目
 - 旬8日目
 - 旬7日目
 - 旬6日目
 - 旬5日目
 - 旬4日目
 - 旬3日目
 - 旬2日目
 - 旬1日目
 - 旬平年値

- 凡例
- 31日
 - 旬10日目
 - 旬9日目
 - 旬8日目
 - 旬7日目
 - 旬6日目
 - 旬5日目
 - 旬4日目
 - 旬3日目
 - 旬2日目
 - 旬1日目
 - 旬平年値

7. おしらせ (前回と異なる項目には **NEW** の印があります)

1) 記載基準の注意点

平年ほとんど発生のないか非常に少ない病害虫については、平年並に少ない発生状態の「発生量平年比」を「平年並」、「発生量程度」を「小」と記述しています。

2) 発表日 **NEW**

本年度の病害虫発生予報は次の予定で発表します。

- 第1回 4月26日(済み) 第2回 5月24日(済み)
- 第3回 6月21日(済み) 第4回 7月19日(今回)
- 第5回 8月23日(木) 第6回 10月18日(木)
- 第7回 3月22日(金)

3) 利用方法

全部または一部をコピーして回覧・配布にご利用ください。ただし必ずページの右下にある「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてください。

病害虫防除所ホームページには、この予報をはじめとして、不定期に発表される警報、注意報、特殊報、技術情報や、各種のグラフ、写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/>

このホームページはフリーリンクです。リンクする場合、事前の承諾申請等は不要ですが、事後で結構ですのでメールにてご一報いただくと幸いです。

4) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の見方を説明した「病害虫発生予報利用の手引き」があります。下記のアドレスからお入りください。

http://www.mate.pref.mie.lg.jp/Bojyosyo/files/h24yohotebiki_.pdf

5) メール配信サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせしています。このメールの配信を希望される方は、下記のアドレスからお申し込みください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/merumaga.htm>

6) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。次のインターネットサイトでは、最新の農薬登録状況が確認できます。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報提供システム」

http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm